

氏名(本籍)	ひじ かた ゆう こ (愛知県) 土方裕子		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4534号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	The Chunking Process of Japanese EFL Readers Focusing on Verb Bias, L2 Reading Proficiency, and Working Memory (日本人EFL学習者の読解におけるチャンキング・プロセス：動詞バイアス、L2読解熟達度、ワーキングメモリを中心に)		
主査	筑波大学准教授	博士(言語学)	卯城 祐司
副査	筑波大学准教授		久保田 章
副査	筑波大学准教授		磐崎 弘貞
副査	筑波大学准教授	Ed.D.(教育学)	平井 明代
副査	関西学院大学大学院	博士(応用言語学)	門田 修平
	言語コミュニケーション文化研究科教授		

論文の内容の要旨

本研究は、意味的なまとまり毎に文章を区切って英文を読むプロセスにおける、チャンキングのメカニズムを理論的・実証的に解明しようとするものである。本論は次の6章から構成されている。

第1章は序章であり、背景にある問題の所在および本博士論文の構成について明記している。先行研究を概観した第2章では、文処理モデル、チャンキング、ワーキングメモリについて従来の研究成果の素描と、本論との関連性を記述している。そしてチャンキングを、教師が指導の一貫として示すチャンク呈示と、読み手が読解中に自ら形成するチャンキングに分け、それぞれの実証研究を、第1部(第3章)と第2部(第4章、第5章)において扱っている。

第3章は、チャンク呈示とポーズが読解におよぼす影響について検証した3つの実験から構成されている。実験1では、87人の日本人英語学習者に対し、英文をパソコン画面に(a)全文呈示、(b)チャンク呈示・ポーズなし、(c)チャンク呈示・ポーズあり、(d)文呈示・ポーズありの4つの条件下で呈示し、筆記再生させた。その結果、ポーズ付のチャンク呈示において最も成績が良いことが示された。

実験2では、36人の日本人英語学習者に対し、実験1と同じ英文を、(a)チャンク呈示・ポーズありと(b)文毎呈示という2条件下で呈示し、筆記再生させた。しかし、条件(a)と(b)に有意差はみられなかった。実験3でも34人の日本人英語学習者に対して、(1)文呈示・ポーズなし、(2)文呈示・ポーズあり、(3)チャンク呈示・ポーズなし、(4)チャンク呈示・ポーズありの4つの条件下で呈示し、筆記再生させたが、4条件間に有意差はみられなかった。

実験によってポーズの効果に差が出たことについて、筆者は呈示時間の差異に着目し、次のように論じている。チャンク呈示とポーズの挿入が理解度向上を促進させない原因のひとつは、十分な呈示時間があり、チャンク呈示がなくとも読み手自身で処理することができることであると考えられる。また別の可能性とし

て、読み手が入力されるインプット情報の速度に追いつかず、単語処理のレベルで躓くことがあげられる。3つの実験の結果から、チャンク呈示とポーズ挿入の有効性は、文字の呈示時間との関係によって決定されるものと考えられる。

続く第4章では、読み手自身のチャンキング単位を特定するためのパイロットスタディを実施している。ペーパー形式とパソコン呈示形式のそれぞれの方法から読み手のチャンキング単位を測定し、読み手がより速く正確に読めるチャンクの特性を試みた。

第5章では、実験4、5、6を通して、読み手が形成する知覚チャンク、意味統合単位とチャンク呈示の関係について検討している。これら3つの実験は同じ読み手が通して受験することで、量的にも質的にも比較が可能な構成になっている。そして、日本人英語学習者の読みが言語特性に影響を受けることから、動詞バイアス（他動性）に焦点を当てて実験計画を立てている。

実験4の結果は、日本人英語学習者がほぼ文単位で知覚できること、他動性は知覚チャンクにも影響を与えていることを示した。また実験5からは、意味統合は句末で行われていることや、他動性が影響しており、予測と反する度合いが強い用法では、処理の遅延が見られることが明らかになった。また実験6においても、他動性がチャンク呈示の読みやすさを決定し、他動詞用法が強い動詞と目的語を別のチャンクにして呈示する場合に読みにくさが高くなることを、量的および質的分析から示している。

実験4-6の照合により、チャンク呈示が有効になる読み手の特性は、L2読解熟達度やワーキングメモリ容量では説明できなかったが、読み手自身のチャンキング・パターンは区別できる傾向が見られた。特に知覚チャンクの大きさはチャンク呈示の効果の有無に大きな影響を与えていた。具体的には、知覚チャンクが小さいとチャンク呈示があることによって読みやすくなったが、知覚チャンクが大きい場合には、意味統合単位の大きさも加味してチャンク呈示の効果を考慮する必要があった。知覚チャンクも意味統合単位も大きな読み手は、概してチャンク呈示に読みにくさをあまり感じなかった。しかし知覚チャンクが大きくても意味統合単位が小さな読み手にとっては、チャンク呈示は読みにくくなるものであった。

第6章の総合考察では、本論文で分かった結果をまとめ、第2章で示した文献と照合しながら考察している。また、教育上の示唆としては、句を基準としたチャンク呈示とポーズの利用を積極的に促すこと、テキストをチャンク毎に区切る際には、主語と動詞など品詞のみを考えるのではなく、動詞の他動性に注意すること、読み手が自らチャンクを形成するプロセスを考慮することなどがあげられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本博士論文は、日本人英語学習者の読解におけるチャンキングの特性を明らかにすることを目的としている。そして、読み手が自ら形成するチャンクと、教師が呈示するような句を基準単位とするチャンクの関係に焦点を当て、どのような読み手に対して句基準のチャンク呈示が有効になるのかを調べたものである。本博士論文の優れている点は、大きく以下の4点にまとめられる。

第一に、従来の英語教育で扱われてきたチャンキングは、チャンクに区切って呈示した場合に内容理解を促進させることができるか否かという点に終始し、理論的な背景に裏付けられていなかった。筆者はこの事実に着目し、文処理モデルや心理学分野のチャンキング理論、さらにはワーキングメモリの概念を駆使しながら、チャンキング過程の解明を試みた。その結果、チャンキングという研究テーマを柱として、英語教育学と心理学や言語学との理論的な統合の方向性を見いだした点において、本博士論文は評価できる。

第二に、本博士論文の独創性の高さがあげられる。従来はチャンク呈示とチャンクの測定が別々に行われていたが、本研究では、同一の協力者に対して両方実施した。これは、チャンキングという性質を理論的に探求する上でも、実際の教育現場への示唆を模索する上でも貢献できる、重要な視点だと考えられる。チャ

ンク呈示の効果は、L2 読解熟達度やワーキングメモリのような要因が単体で説明できるものではなく、読み手自身がチャンキングを行うそのプロセスと照合することによって明らかにすることが重要であろう。緻密な実証手続きに基づき、その照合を可能とした実証研究に挑んだことは、高く評価できるものである。

第三に、チャンクの心理的な大きさのみならず、動詞の他動性という言語特性にも着目した点が評価できる。自他両用法の使用が可能である動詞を取り上げ、本実験とは別の日本人大学生を対象にした予備実験を通して、そのような動詞は他動詞用法が予測されやすいのか、それとも自動詞用法が予測されやすいのかを検証した。このように言語特性を考慮することにより、心理学分野などのチャンキングのモデルをそのまま転用するのではなく、日本人英語学習者の読解に適応するチャンキング研究となっている。

第四には、本博士論文の研究計画の綿密性と正確性が挙げられる。実証研究は第1部と第2部から構成されており、それぞれに実験が3つずつ含まれている。これらは全て個別調査であるため、調査実施に膨大な時間をかけており、労作であると言えよう。特に第5章に含まれる実験4, 5, 6は、3つセットでの実施のため、調査は協力者一人あたり4時間半も要している。しかし、このことにより、どのようなチャンキング単位を形成する読み手がチャンク呈示に対してどのような反応を示すのかについて、より適切な検証が可能となった。そして本論文全体を通して、複数の予備実験を経てから本実験に入っていることなどの綿密性も高く評価できる。

今後の課題は、各章で行われた実験結果を大きな観点から統合し、チャンキングのより普遍的な性質を明らかにすることであろう。すなわち、第一に、各実験を通じた考察の整合性を確認することが必要である。複数の実験が博士論文の中に含まれているため、様々なモデルを用いた解釈が、ある実験では当てはまっても他の実験ではさらなる考察が必要なところなどもある。第二に、質的考察をさらに充実させ、量的実証研究から得られたデータを補足説明する必要があるだろう。そして第三に、先行研究で概観したこれまでの研究成果と本研究の各々の実験結果を、さらに関連づけて考察をすることにより、本研究の学術的な位置づけを高めることができると考えられる。また、今後は、読解速度、L2 読解熟達度、ワーキングメモリ容量、言語特性などの関係性が、常に一定になるように数式で表せられると、チャンク呈示のより良いあり方も透明化し、教育的示唆も一層大きくなるだろう。

こうした一定の課題はあるものの、本論は、これまでの心理言語学などの研究成果に裏付けられた、学際的で緻密な実証手続きを経た研究であり、英文読解プロセスの理論的な解明への寄与は大きく、高く評価できるものである。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。